

自家栽培イチゴの加工販売と昭和村イチゴパーク構想 ほさか農園



6次産業化事業をはじめたきっかけ

「やよいひめ」の認知度を上げたいと加工品でブランド化を目指した。

保坂貴仁さん

6次産業化認定事業者（平成25年5月31日認定）

ほさか農園

〒379-1204 群馬県利根郡昭和村森下722

TEL/FAX：0278-24-6862

代表者：保坂貴仁 主な事業：野菜作農業等

県産品種「やよいひめ」の
認知度を高めたい

イチゴのハウス栽培を45年ほど前から手がけてきたほさか農園。先代の初次氏は、群馬県のオリジナル品種「やよいひめ」の開発に携わった。当園では無加温栽培のため、着色のスピードが遅く手間がかかるが、何よりおいしさにこだわって栽培している。大粒で香りがよく、甘みと酸味のバランス抜群の品種だが、全国シェア1・4%と県外では認知度が低い。

「親父が産みの親なら、私は育ての親になりたい」と語る代表の貴仁さんは、平成26年にドライ加工を始めた。B級品をスライスして専用乾燥機で低温乾燥させた



「ドライやよいひめ」は、味や香りがより凝縮され、半年以上保存可能なためギフト需要も見込める。「恋する果実」と命名し、ラベルデザインも自ら考案した。

利根沼田フルーツパーク
構想へと広がる夢

加工を始めて約1年で想定外の広がりが見えてきた。加工時に出る端の部分は、紅茶専門店と共同で「いちごの紅茶」に製品化。香料では出せない本物の味と香りが

好評だ。加工品用に作った完熟のイチゴ果汁も「100%やよいひめジュース」として商品になった。赤城高原サービスイリアでも共同企画のイチゴスイーツが続々商品化され、人気を呼んでいる。平成27年からイチゴのパックにもラベルを貼り、ブランド名の定着を狙う。箱売りに向かない超大粒の1粒パックは「一口食べたなら恋しちゃう」味など、ネーミングからの反響も大きい。

6次産業化の一番の恩恵はブランドインングだという保坂さん。認定になったことで各方面の専門家の助言をもらえ、デザインも腰を据えて考案できた。

ブランド名が定着したら、利根沼田地域のりんご園やぶどう園など栽培にこだわりを持つ果樹園の仲間を募りたい。1つの農園だけでは限界がある部分を互いに補って将来的には会社組織も視野に、「利根沼田フルーツパーク構想」へと夢は広がる。

取材後記

安心安全は今や当たり前、いかに差別化し認知度を上げるか。チャレンジを続ける保坂さんの行動力には驚かされる。地域に「恋する果実」ブランド農園を広げ、イチゴのない季節にもお客様が来てくれるようにという「利根沼田フルーツパーク構想」の夢も、現実近づいているようだ。



ドライやよいひめ

「恋する果実」のネーミングから結婚式の引き出物等にも引き合いがある
1パック 600円

一粒パック

超大粒イチゴのプレミアム感がインターネット等でも話題に
1パック 300円

